
ルーズリーフと異世界を

星羅 琴音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルーズリーフと異世界を

【Nコード】

N4618Y

【作者名】

星羅 琴音

【あらすじ】

突然放り出された先は異世界！？しかも最悪なことに魔王と勇者の最終決戦チックなところで・・・何でもできるようになった彼が異世界でしようとするのは・・・？

ルーズリーフが主人公な異世界メモコメデー

0話 放り出された。

突然だった。

もうほんと唐突に。

なんでこんなことになってるのやらさっぱりだ。

簡単に言おう。

目の前には魔王っぽい人が傷だらけになりながらこちらのほうを指差し、後ろには勇者っぽい人が俺のほうに向かって剣を持って走りこんでくる。なんで魔王と勇者だとわかるかというと。見た目恰好からしてもそうなのだけど。

寸前まで叫びあっていた言葉がこうだ。

「まおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

「せめて貴様だけは！喰らえ勇者！我が命！華麗に散らせてくれよう！……！極魔砲！」

そんでまあ。真中にいる俺に一瞬ポカンとした両者だったがそれ以

降はよくわかん。なぜなら魔王（つぱい人）が放った光の塊みたいなものが俺めがけて飛んできたからだった。とっさに持っていた物で顔をかばうけど良く見てみると・・・

[illegible]

はい終わった。こんなもんで防げるわけないもん。

なんでこんなことになったのやら。俺はなんもしてないのに・・・

。　　そう思いながらついさっきまでのことが真っ暗になった俺の目の前に浮かんできた。

0話 放り出された。(後書き)

ちょっと短めですが切り上げ

どうも星羅^{ひし}です 拙作ですがお付き合いしていただけたらと思います
す ^^

1話 落ちついた。

なんてことはない生活だった。

何か明記できるような事をしてたわけでもないし、特技や何があるわけでもなかった。

今日も俺 松浦まつうら 龍りゅうは学校で移動教室の準備をしていた。

「おい松浦ー早く行かねえと遅れちまうぞー。」

「おうー今行くー。」

友達にも満足しているが深く付き合おうとも思ったこともない。不満はないが色々なことがつまらなかった。そして移動教室に必要なもの、まあルーブリーフとか筆箱とかだが それを持って席を立った。

放り出された。

一瞬の間もなかったのだ。席を立った俺が瞬きをしたかどうかというその時間で俺は変な所にいた。

後はそのままだ。魔王っぽい人の攻撃を受け、俺はお陀仏した。・
ん？

「・・・い！・・・おい！」

誰かが俺の頬を叩いている。ん？この声さっきまで聞いていたよう
な・・・？

「おい！起きろよ！大ジョブか？！」

目を覚ますとそこは勇者でした。

「じゃなくて・・・誰だ？勇者っぽいひと？ここは？」

「まあ・・・落ちつけ、といっても無理か。状況は後で説明する。
それよりも大丈夫か？魔王の極魔砲を受けていたようだが・・・」

「ふう・・・すまん、取り乱した。」

勇者っぽいひとがゆっくり話しかけてきたおかげで少し落ち着いた。

・・・しかしこの状況・・・あれか、異世界トリップとかいうやつか。・・・ふう。

ちなみに魔王のほうはいなくなっていた。

これはいい。(・・・)

つまらない人生には飽き飽きしていた。

せいぜい楽しませてもらおうか。勇者だか何だか知らないけど利用させてもらおう。俺はまだまだ何も知らないからな。

こんなことを考える半面ビビってる俺もいるのは確かなのが痛いところだけど・・・。

「状況を説明する前に移動をさせてもらってもいいかい？僕の仲間がけがしててね。」

「む・・・ああ大丈夫だ。俺にけがはないようだしな。」

「そつえば君。どうして助かったんだい？その本・・・かな？が極魔砲の魔力をぜんぶすいとっていたようだけど・・・まあ、そのおかげで魔王は力尽きたみたいだし、僕たちは助けられたんだけどね。いきなり現れたこともあるし・・・色々聞きたいことが山ほどあるよ あはは。とりあえずここを出て一番近くの村に行こうか。」

「ああ。わかった。・・・ッ！！！」

勇者の言葉にうなずき立ち上がったその瞬間、ルーズリーフ

が光りだした。

それはもう煌々と。そして光がおさまりもう一度見てみると。

・・・何ともなってなかった。

「・・・彘？」

思わず変な声を出してしまった俺。

「いったいなんだったんだい？まさか魔王の魔力が暴走でもして・・・！」

「いや・・・そういうわけではなさそうなんだけど・・・。危険があるわけじゃないみたいだ。」

色々言ってくる勇者をなだめて俺たちは勇者の仲間を連れて村へと向かった。

・・・車がないというのはわかるが。俺には三日歩くというのはなかなかの苦痛だったということだけ言っておこう。

移動中に分かったことが一つある。

ルーズリーフの最初のページに鉄のような光沢、しかし柔軟性のある良くわからないページができていた。そこに書かれていたのは

『この本に書かれたことはすべて実行されます。 契約者 《松浦 龍》』

本っていうかルーズリーフなんだけどな。しかしこれに書かれていることは気になるな。色々試してみたい。俺だってこの世界に魔法があるのを知って少しわくわくしているのは否定できないからな。なかなか楽しくなってきたぞ。後は情報収集だ。

?????

意識を持った。

何が起こったのかは私にはわかりませんけれど。

ただ。目の前の彼が私の主ということだけはっきりとわかった。

彼を見terるとしらずしらず笑ってしまいそんな感覚に陥る。

ま、私 ルーズリーフなんですけどね

1話 落ちついた。(後書き)

だんだんと龍視点が減るのは仕様ですw
本来の主人公目覚めちゃったので。

2話 移動そして村。

村への移動中、勇者に俺がどうやら異世界から飛ばされてきたらしいということ話を話すとこの世界のことを説明してくれた。

ちなみにルースリーフのことについてはなるべく話さないようにしようと思った。面倒に巻き込まれるのは望ましくないからな。

勇者は自分のこととこの世界、そして魔王のことなどを教えてくれた。

この世界はいわゆる王道RPGチックな感じだ王国があり、村があり、魔物がいて、それを使役する魔族、そのトップの魔王。

世界のことから言うとこの世界は大きく区分すると4つ。騎士と武術の国ギュランダ王国。魔術と調律の国リーンメルグラン皇国。生産と加工の国ドワーヴン自治領。各々 王国 皇国 自治領 という呼ばれ方をされており、それぞれが対立ということはせず助け合い、魔族に対抗していた。その魔族の国というか領土を魔域を呼んでいるらしい。

さらに街単位にギルドという物があり冒険者などのランク付けを行ったりしているらしく、ここら辺は俺も聞いたことのあるような異世界だった。

勇者は名前をリーグ・ゲインハルメスというらしい。すらりとした180ちよつとの身長。いわゆるイケメンであり、金髪に・・・って言うてていらいらするからやめる。近年になって問題が多くなっ

てきた魔物をとめるためには魔王を倒さないといけないというありきたりの目的のために王国で開かれた武道大会に参加した騎士団小隊長であり、優勝者でもあったらしい。仲間を集い、ようやく魔王城にたどり着き最終決戦を迎えて死闘を繰り広げ、そこで俺が出てくるらしい。

・・・うーん。何ともいえん。

勇者一行はこの後村に着いたら勇者は仲間の治療をすませ、王宮に報告に行くという。

「どうする？リユウはこの後僕たちについてくるかい？君はみよりもないだろうし、この先生活が大変だろう。なにより国に行けば元の世界に変える方法が見つかるかもしれない。」

「いや、いいよ。俺は俺でどうにかするさ。それにあまり俺が異世界からきたと知られたくないしな。」

それに帰るつもりは毛頭ないしね。と心の中で付け加えておく。まあ知られたところでどうということはないかもしれないけど、金持ちや貴族とか言うやつらのおもちゃにされたくないのが一番だ。

「ふむ・・・そうか。つついたようだ。ここがアムル村だよ・・・とはいってももう人も住んでないから僕たちのテントと廃屋があるだけなんだけどね。テントはあいてないかもしれないけど廃屋はきれいだころを探して休むといいよ。君も疲れてるだろう？」

「ああ。そうさせてもらおう」

「明日の朝には出るつもりだから心変わりしたら言ってくれ。それと・・・はいこれ。」

と勇者にわたされた革袋には銀色のコイン、銅色のコイン、それに灰色の10センチくらいの棒が入っていた。

「この世界の通貨さ。この先色々あるだろうし、持ち物を何も持っていないだろう？少ないが持っていてくれ。」

勇者は俺に王宮とは逆向きの先に人がいる村があることと通貨のことなど教えてくれたあとなかまのほうへ向かった。

さて、俺も寝床を探して休むとするか。色々しらべてみたいこともあるしね。

???

主のお役に立ちたい。

そんなことばかりこの三日ほど考えていました。

しかし私はしょせんモノであり、話すことばを持ちません。

けれども、あの力を使って主の望みをかなえることはできるはずで
す。この世を捻じ曲げられるほどの子の力で・・・。

そして私はページの最初に主へのメッセージを。

———この本に書かれたことはすべて実行されます。

と。

3話 ルーズリーフと会話する

ルーズリーフと会話中なう。

いや、嘘じゃないぞ。

『どうかしましたか?』

「いや、何でもない。」

いったん説明することにしよう。

~~~~~

勇者と別れた俺は村の中心にある広場から一番離れた民家に入った。  
少し汚い程度だったがまあ気にするまでもないだろう。

状況を整理しよう。俺は比較的きれいな椅子に座り、近くにあった  
テーブルに持っているものを置いた。

所持品。ルーズリーフ（銀のページ付き） 筆箱：中身（シャープ  
ペン2本 芯30本入り3個 消しゴム2個 赤ペン2本 ボール  
ペン2本 ペンライト1本） 勇者の革財布（銀貨3枚 銅貨10  
枚 灰色棒（尖貨というらしい）30本）。

服装 学生服

・・・少ないな。食料も勇者と別れた今ではどうするかも見当が付いていないし。

ちなみに通貨は尖貨10本で銅貨1枚　銅貨50枚で銀貨1枚　銀貨50枚で金貨一枚　だそうだ。

・・・そういえばルーズリーフに書いてあったことを試していなかったな。

そう思い俺は銀のページをめくり書き込むことにした

「まあ、成功するかどうかはわからないが当面の目的の食糧だな。」

取りあえずだが書いてみないことには始まらないな。

——ハンバーガーを手のひらに出す。

書いてみてシャープペンを置いた光とともにハンバーガーが出てきた。

これはいいな。本当にできるとは。

しかしいきなり出るのでは少々不便だな。やっぱり何か言葉にしてから出すという方法ができたほうがいいな。試してみるか。

・・・ん？なんか銀のページが光っていたような。

早く試したい俺はそのことをいったん置いておいてさっき書いたのを消して新たに書き換えた。

——ハンバーガーを出すには「ハンバーガー」と唱える。

「よし、ハンバーガー。っと」

おお出てきた。

しかし・・・この世界にハンバーガーがあるかどうか知らないけど、この味は間違いなく前の世界のハンバーガーだな。

これはいい。どうやらできることというのは本当に制限がないようだな。

・・・？やはり何か光っているようだな。

銀のページが光っているのをはつきりとみたので開いてみる

『やっと気がついてくださいましたか、主。私はルーズリーフでございます。私がry』

「なんだこれ。怖っ。」

『・・・』

俺の言葉に反応するようだ。一瞬光った銀のページは黙ったかのよう  
うに書き変わった。

会話しているようだ・・・。

「すまない。ルーズリーフの・・・意思？それとも何か別のモノか・  
・・・？」

『意思ということであっていると思います。強大な力を感じたかと思  
った時には私は私を自覚し、あなたが主であること。このちから  
でどのようなことでもできるということを知りました。』

強大な力・・・魔王のあの攻撃をルーズリーフで受けたからか・・・  
？

「ふむ・・・。何かほかに分かることはないだろうか。」

『すみません。私には・・・。』

「そうか。」

聞き出せることはほとんどなかったが色々試しつつ必要なものをそろえておいて損はないだろう。

~~~~~  
こんなところだろうな。

とりあえず俺は

——元の世界にあったものは、名前をいい形を思い浮かべれば目の前に出せる。

と書き込み、私服、バッグなど移動に必要なものを出していった。
しかし・・・周りとの違いを考えれば、この世界にあった服装を探さないとな。

そう思いつつも眠くなってきた俺はうつうつとしていくのだった。

~~~~~  
????

とうとう主と会話をすることができました。

怖がられてしまいました。

まあ仕方ないことだと思います。

・・・ええ。しょうがにゃいのです。ぐしゅ。

コホン。これでどうにか主の役に立てそうです。

主は寝てしまわれたようですね。

おやすみなさい主。どうか良い夢を。

#### 4話 検証する。

朝起きて外に出ると勇者ご一行は旅立ちの準備をしていた。

「お、今君の所に行こうと思ってたんだ。僕たちはもう王国に戻るけど、君は本当に来なくてもいいのかい？」

「ああ。色々試したいこともあるし。短い間だったけど世話になった。」

「うん。それじゃあね。よし出発だ！！」

そうして勇者は王国へと戻っていった。いつかまた会うような気がする。・・・カンだ。

俺は寢床へ戻りさっそく作業を開始した。

今の時点でするのはまあまずこの村を出る前にルーズリーフのことができるだけ検証していく。

まあこれは大切なことだからな。いくら何でもとはいえ何か条件があってもおかしくはない。いざというときのフラグ折りってやつだ。

「食料はだせる。生活に必須なものは大丈夫なはずだ。この世界に

合わせた服装は勇者一行にサイズが大体同じようなものをもらったからいいとする。・・・あとはやはり身を守るものが必要だな。それに魔法を使ってみたいというのもあるしな。よし、ちよっくら試してみるか。」

俺は筆記用具とルーズリーフを持って外に出ることにした。

すこしはここにいることになるだろうし、ちよつとこの村を一回りしてからというのもいいだろう。  
軽く概要を調べておくか。

この村は外周やく500メートルくらいの円形で、周りは1メートルくらいの岩壁でできている。だがやはり魔王城に近いこともあってか住民は皆無。岩壁も結構な部分が崩壊している見たいだ。中央に噴水のようなものがあるが倒壊。軽い広場になっている。そこから十字に主要な道が各出口につながっている。

家はぜんぶで20もないな。鍛冶屋や武具屋が見受けられるのはやはりこれも魔物が出たりするからか。

・・・まあこんなところだろう。

俺は広場にあった古びたベンチに座り、さっそく魔法を試してみることにした。

「うーむ・・・火とかだすとここの家ほとんど木造だから燃えてしまうな。水系でやってみるか。」

水って実際にぶつけるだけじゃダメージって実際どうなのだろうと思ったので水圧カッターをイメージして・・・と

——水圧で水をレーザーのように出すには「ウォーターカタ―」といい手のひらを対象に向ける。

「よしこれでつと。言うだけじゃ何かあった時の誤爆が怖いからな対象は・・・噴水の残骸にしてみるか。ウォーターカタ―！」

・・・ん？おかしいな。何も出ないぞ。

「ウォーターカタ―！ウォーターカタ―！・・・どういうことだ？やはり何か条件があるのか？」

俺は検証のためファイアーボールやウィンドカタ―などの聞いたことのあるような魔法を同様に試したがこれらも全くできない。

と、色々試していると銀のページが光りつたので俺はそこを開いた。

『書かれたことができないようですが、私にもなぜだかよくわかりません。すみません。お役にたてず。』

「いや・・・それより何か思いつかないだろうか。どうして食料やそのほかにも色々出すことはできたのに魔法が使えないという理由が。」

『考えられる条件はいくつもありますね。一つは魔法ということです

から出すために魔力などといわれるものが必要であり、主はそれを持っていないからできない。一つは主が実際に見たこと、感じたり、触ったりしたりしたものしか実行することはできない。などが挙げられますね。』

うーむ・・・前者だった場合はやばいな。何もできないということになる。

後者の可能性にかけて唯一見たことのある魔法、魔王が使った極魔砲をやってみるか。

——極魔砲を使うには対象に手のひらを向けて「極魔砲」という。

・・・原理がわからないのでこう書くしかなかった。これでできなかったら・・・いや、変な方向に考えるより、物は試した。

「残骸にむけて・・・極魔砲!!」

力が集束し残骸に向けて放たれる!! 成功だ。後者で正解だったようだな。

砂埃が落ち着くとそこには大穴があいていた。

「・・・やりすぎた。」

威力が強いというのも考えものだ。ここは武器をとってしばらく鍛えて、自己防衛くらいできるようにしてからじゃないといけない。

最初から大きな痛手だが、このくらい出ないと楽しめない。そう  
思った俺は武具屋に武器をあさりに行くことにした。

???

主がしようと思ったことを実行することができませんでした。

このルーズリーフ一生の不覚であります。一生があるのかどうかは  
わかりませんが。

色々悩んでいる主に私が考えうる限りのことを進言すると何かがで  
きたようです。

主のお顔が輝きました。

そしてどこかへ駆けて行きました。・・・私を置いて。

・・・いいんです。主が楽しそうなので。ぐすん。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4618y/>

---

ルーズリーフと異世界を

2011年11月16日20時24分発行